

川 柳 の 証

Pensoj flugas trans la land-limon

麻生路郎★主宰



Senryu Zasshi
No.269

OCT. 1949

昭和廿三年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿四年十一月一日發行第四卷第九號

（每月一回）日發行

創刊大正十三年・通卷二百六十九号

日 月 に 積 上 げ る 研 究

—句の会か語りはため座談会—

句會で作る句

路 郎 句會で作る句と、家で自由に作る句に就て話されたい。どうです？豆秋君……

没食子 豆秋さんは句會でも家でも良い句を作られますなア。

豆 秋 iya……

没食子 〓 私に句會ではさつぱりあきまへん。

路 郎 〓 先づ第一に句會で作るとききの作句の態度は一般にその題を課せられるから誰でも皆その題を自当にしてそれに就ての色んな運想を生んでそれで句に作ると思ふのが十中八九の人達の態度であらうと思ひます。例へば箸と言ふ題が出れば喰べ初めの子供のことを考へたり、掛うどんに付いた割箸のことを思つたりして、それからまるユーモアや皮肉や穿ちを出してゆくのが一般の作家の行き方ですから選をしてゐる場合でもその題がうまく生かして詠み込まれてあるときは非常に良い句であると思ふべきで、詠み込まれてあると一寸誤魔化されやすいですが、題を抜きにしてその句を考へた場合に案外川柳として、下らない……と言ふより、左程感心しない句である場合が多い。それが句會ではあまり良い句が出来ないと言ふ欠点であらうと思ひます。

古 方 〓 処がねえ案外句會で

抜けた句を有難がつて名句やと思ひましてね(笑聲)チャンと手帳に清書してね、やがてそれだけで古方句集が出来るやうな氣になるんですよ。

豆 秋 〓 句會では沢山集つて深刻な顔をして作句してゐたり、もう後五分でメ切ますと言はれてみたり、自然興奮と刺戟があつて、自分の家では多忙なんかで作句出来ん人でも句會では沢山作れると言ふのがまあ句會の特長でせう。

古 方 〓 私でも川柳塔に抜けた句は〇をつけて神棚に上げた心算で眺めさせて頂きます。処が後で読み返してみると、やつぱり〇の付いた句の方が良いやうな氣がします。

没食子 〓 今、奥さんの言はれた席題に対する連想なのですが、句會に於ける短時間の連想であるので、勢ひ範圍の狭い連想になるのではないでせうか。で句も又佳句に乏しくなるのではないでせうか。

豆 秋 〓 結局句會は作句練習が目的である關係上佳句に乏しいと言ふのは当然かも知れませんが、偶然句會でも創作意欲が飛躍して創作以上の名句が生まれるやうな場合もたまにはあります。その例で頭に残つて居ますのは故愚陀の作で「カッパ同志愛の言葉は泡になり」です。これは句會で生まれた名句です。

路 郎 〓 さうやね(感)入つに

た様に)

路 郎 〓 あれば句會の句だつたかネ

豆 秋 〓 え、さうです。かほるさんとこでの句會のときでした。

亞 鈍 〓 それはね、成程今聞いても佳句と言ふより、それは名句や、豆秋の言ふ通り……然し名句に違ひないが、それはカッパと言ふ題でせう。カッパと言ふ課題そのものに恋を持つて来た処などがコヂツケてゐるんですよ。そしてそのコヂツケることに於てそのモンタージュによつて愛の言葉が泡になりと言ふ泡が生きて来るんだ。泡と恋と關係がないからね。カッパそれ自身が居るやら居ないやらわからんからね。およそ作者としては場所も時間も問はないものでなければならぬのですよ。愚陀君は僕や丹路の学校の後輩だが、丹路は兎も角、川柳では僕の先輩だから愚陀が句會のカッパの句で愚陀たらしめたのかどうか知らない。然し愚陀の句集も出てゐないから何とも言へないがカッパの句のやうな句を句會でなくても作り得た人だと思ふのですが、どうですか？

路 郎 〓 愚陀の句集は出て居る。愚陀の句としてカッパの句は有名であるが本当は愚陀はカッパの句以上の句を残して居る。句集は彼の友人の乱

歌が自分の句と愚陀の句とを一緒にして「潮騒」と言ふ句集を不朽洞から出して居る。

亞 鈍 〓 それで解ることです。句會に於ける偶然の名句、必らずしも偶然ぢやないと言ふことだ。

路 郎 〓 勿論さうだ。

亞 鈍 〓 そのことですね、そのことですね。例へば早い話が僕をとり上げてみたつて(笑聲)僕は川柳家ぢやあないですよ。強ひて言へば川柳の批評家だ。さうでせう？

路 郎 〓 え、さうよ。

亞 鈍 〓 そんなことはないよ。鈍 〓 それはさて置き僕は句會以外に川柳は作つて居りません。(笑聲)その証拠に僕は句會で抜けたことがあります。

路 郎 〓 そんなことないわ、よう三才に入つてはりますやないの……

亞 鈍 〓 作句と言ふものはさう言ふものなんだ。良い川柳を作らうと思ふなれば身も心も日常座臥が川柳的にならなければならぬんですよ。

路 郎 〓 本当にさうですよ。今亞鈍さんの言はれた事や皆さんの言はれた事を綜合して考へてみて……

句會場は單なる作句練習場ではありません。成程句會では時として名句の生まれることもありませう。然しその名句は自分の句として後へ残す程の

傑作ではありません。

と言ふのは先に私が申しました様に作句の態度が題を目標としておりませんでした。自分として心のあり方の現れやうが少ないのではありません。自分としての心のあり方を現はさうとするには相当の時間が掛ります。丁度断水の後で水道の水がチヨロ／＼と出かけた時に大きなバケツを下に受けて一パイになるのを待つてゐるやうなものですから相当の年限作句して居られる人でも句会場ではさうした時間が許されぬためにその場の間に合せの句を作つてしまふ訳です。私は本社句会ときは一事務員として出席してゐますので、たいがい聞き役です。句会場には相当年限を重ねた方が出場してゐられますのにその割に私の機待してゐる様な句がないと思ふのです。それは兼題を課せられてゐるにもかゝらず、句会へ来てから兼題も作句される人が殆ど大方です。

古 方 Ⅱ そんなことはありませんよ。

没食子 Ⅱ 僕もそれはある。えらい痛いなあ。

腹 乃 Ⅱ 痛いことも言ふとかんと……句会には久し振りに会ふ人もあるので作句の時間以外に雑談の時間もみておかなければなりません。

没食子 Ⅱ さうですなあ。

腹 乃 Ⅱ 若し多年功を経た作家にさう言ふ敬虔な態度があらまらずなら、二ツ三ツ位余計に出された席題に於てももつと秀句が生れる筈です。然し本社句会には初めての作家も来てゐられるのですから、或は遠慮して居られるのかもわかりませんが……

亞 鈍 Ⅱ 僕は徹頭徹尾申します。川柳人は場所と時間に拘らず、課題吟と自由吟とに拘らず名句が出る時には出るし、出ないときには出ないだけの話です。初歩の僕なんかにしてみたら句会は作句道場でせう。古武士になつたら句会であらうとなからうと名句が出る時には出るんだ。それ程川柳は主観的なものでなく客観的なものですか？

没食子 Ⅱ 客観的ですか？
亞 鈍 Ⅱ さうです。川柳は誰にでも解らなくちやならないんですから、誰にでも解ると言ふことが敢て客観的であるとは云ひませんよ。

没食子 Ⅱ それは解ります。
古 方 Ⅱ 句会が作句練習場であると言ふ取を申し上げませう。句会で学び取ることの第一は省略と言ふ問題ではないでせうか。省略が句会と言ふ定められた時間に縛られることによつて自然に会得出来るのです。何しろ川柳は十七音字に纏めなければならぬのですからね。こゝろ言ふたら叱られるか知らんが、さつきの愚陀の名句も言ふてみればモヤモヤとしてゐるうちに纏つたものだと思はれます。然しそのモヤ／＼はですね、單なるモヤ／＼ではありません。川柳三昧に入つてゐるうちに自然に生れた一つの作品です。それは本人には得心のゆかない状態かも知らんがチャンと心理に合致したものを持つてゐたのです。だから名句になつたのです。これは句会に限らんと言ふものではありませぬ。句会に限られた時間内に

出席者

- 麻生路郎
- 高鷲亞鈍
- 市場没食子
- 須崎豆秋
- 戸田古方
- 麻生葭乃

句會での選

於て生れた省略の醍醐味からのものだと思ひます。

没食子 Ⅱ 句会で私が選をした場合、兼題の場合と席題の場合と集句に於て句のレベルが違ふのです。時間的にやゝ余裕があると思はれる兼題を選する場合に於ては自分の思つてゐるレベルは近いが、それ以上の句が

まります。が、席題の句は遙かに兼題より劣つてゐると私は何時もさう思ふんですが……

豆 秋 Ⅱ 僕は選者のことに就て一言したいと思ふんですが……大變とつびな言ひ方ですが宝籤で二百万円當つたり空を引いたりしても、これは運が悪かつたで解決出来ませんが、天に抜けたり没になつたりした場合はさうはゆきませぬ。天の句は皆が成程と思ふ句でなければならぬと思ひます。こゝで選者の責任と言ふものが生じて來ます。地方の支部でも此の選者のことに就ては相当悩まされてゐる事だと思ひます。例へば村会議員やボスであつたりするために選者にまつり上げなければならぬやうな事情のときもあると思ひますが、これは文学の冒険であることは勿論の話でどんな事情があろうとも、こんな事は避けられたいと思ひます。

腹 乃 Ⅱ それには幹事たる人の英断が必要です。それは如何なる事情があらうとも又、社会的にどんなに地位が上であらうとも、川柳の年限の浅い人は選者を廻されたときに辞退するのが文学者愛好者のためにも礼儀であると思ひます。

豆 秋 Ⅱ どうでつしやろ……選者も味噌や醤油のやうに登録制にしてはどうでつしやろ

(笑声) さうなつたら、えらいこつちやろな「一つ私を選者に頼みます」言ふて……

古 方 Ⅱ 選者も昔は先生のお許しがあつたらなれなかつたのでありませんか？ さうでなければいかんでせう？
亞 鈍 Ⅱ 初心者には題が與へられなければ作れん。要するに僕は小学校の時には、綴方の場合、あれを書け、これを書けと言はれて書いたが、僕が文学青年になつてからは自由に書いた(先生の課題にとらはれずに)。それから本場に文学をやり出しましたが、課題を與へられなくちやあ書けない。と言ふやうなことは僕は知らんけど。本當を言へば題を與へられても與へられなくとも書けるべきものがその人間性に於て出るべきが眞実だと思ふ。それが本當を言へば川柳家の使命でなくちやならない。と言ふことは路郎師の句の場合吟味して解らなければ川柳家の素質がないと云はねばならないだろ。

豆 秋 Ⅱ 選者の軸吟は是非附けて欲しいのは勿論ですが、選者としては感境の添はない場合には一句の軸吟も出来ない場合もあります。お坐成りの軸吟を出して良いものか悪いものか、これも考へものではないです。

没食子 Ⅱ さうでんな、出来んときがあつて困りまん。僕



下山さんは自殺か他殺か

浅田 右聞

総裁のおれが鉄路をけがすかい

七月五日八時半普通に役所の自動車で家を出た下山総裁が九時半三越にはいつたまでの行動がハッキリしているがその後行方不明で六日午前一時半西新井の鉄路にバラ／＼死体となつて散乱していた東大で解剖の結果は死後轢断と発表され、死因は不明だが、自殺とはきめられないとある。之に対し慶大側は解剖もせず、現場も見ないで「自殺だヨ他殺じゃない」と半帖をいれた。開込は自殺に傾き、犯跡は巧みに踏晦されている。バク進する車につきあたれば諸所に皮下出血が起り脳背髄震蕩で血圧

はそんなとき断つて軸吟を附けませぬ。
豆 秋II 以前剣花坊が天王寺の廣田屋で句会をやつた時の軸吟が、(どうしても纏まらず)と言ふ軸吟でした。こんな場合に選者として形式的な軸吟を発表して良いか悪いかが考へられます。かつて阿倍野支部の句会で清水白柳子君が軸吟が出来ませんと辞退したが、それが本場の選者とし

も急下するから轢断されても血が出ないといふのが「自殺派」の主張である。他殺派曰くキズに全然出血がないから死後レキ断だ。自殺とハッキリわかつて四例の轢断死のレキ断のキズにはみな出血があつたといふ。又モルモット実験の曲線を應用してそれら自殺四例の死亡時間を筋乳酸その他から測つてキチンと合つたから山下氏の十一時半も間違いないといふ岡山医大でも家兎実験の測定値と比較して人の死後経過日数がわかれるとの報告もある。下山氏の胃腸内は殆ど空虚で腸下部に少しのこつていただけだといふ。之は食後十時間以上絶食していた証憑であつて而も生きていたことを示すか

ての態度であると思ひます。平抜きから人地天と上つてゆくのだかその次ぎにくる軸吟がぐんと劣つてゐたのではね

古 方II 課題吟と言ふものは一つの課題を與へられることによつて時間の長短にかゝはらず、あらゆる角度から課題を研究することが出来るのだ。例へば此の間の句会で柳と言ふ題が出て柳と書へて

ら檻禁でもされていなければこんなことにならぬ。それに爪の中やポケットに石炭末があつて、ネクタイ、メガネ、ライターが現場に見つからない。自殺としてもマル一日のますくわすのまゝでいて鉄道にとびこむとは考えられない。第一総裁は平素から鉄路は汚したくないといつていたし、この身分の人がどんな事情があらうともスキばらぬまゝ、ヒヨコノノ野道をアラついでカラス妻をつんだりするとは常識で考えられない。其上沿線のロープ工場(当時無人小屋)の扉に手のかたらしい血がついてそれが下山さんと同じA・M・Q型である。A型なら十人に四人はあつてM・Qまで一致したとすると下山さんに違ひあるまい。之を線路へ運んだことは血痕が証してゐる。自殺派以つて如何となす。

ゐるうちに思はない処に植つてゐる柳を見付け出し句を作ることが出来ました。見付け

たからと言つて必らずしも佳句が出来ると言ふ訳ではありませんが、それによつて人間の社会生活に於て最も必要なのは観察力を養ふことが出来ま

す糸口になるものです。句会

は総て課題吟を課するものです。言ふてみれば、句会こそ川柳の作句道場とは言ひながら川柳の矢張り本道と言つてよいのではないでせうか。

腹 乃II 句会では佳吟が少ないと言ふことは事実ですが、それでは句会は必要か、と言へばそうではありませんね。句会に出席する氣持、句を作らうと言ふ氣持、句会があれば必ず忘れずに出席する心掛け、最近或る人が「句会へ出席するのは句が抜けるとか抜けないとか言ふことよりも川柳家である以上、キリス

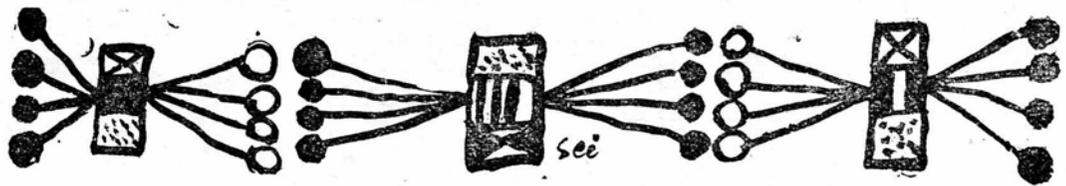
萬能化肥料容器には劇然!

サマギンの……

黒硝子

大阪市東區長野
西通一丁目四十四番
山 銀 株 式 會 社
電話 錦川四四七番

に、句会を休むのは氣持が悪い。私は一つの信仰心から出席してゐる」と言はれた方がありましたが、それだけの熱心さと研究心があればこそその力が平素の自由吟の上に現はれて來るのでせう。
良い作品を生んでゐられる方は必らず熱心であると言ふことは言へます。
それから今日のお話から考へることは、句会ではあまり題を多く出さないこと、一つの課題をゆつくり研究する時間を與へるやうにしたいです。ね。そうすれば、作句道場としても、一層充実するわけですね。
路 郎II ではもう遅いからこれ位にしておこう。お忙しい処を有難たう。
(梨里筆記)



麻生路郎

少女少女タイプに未來賭けてゐる
筆不精釣りに行くひまありながら
レットミーアロン君なんかとは波長が違ふ
滅私奉公だなんて云つていたボス

大阪市 武部香林

夏祭花火を買うと去にたがり
葬式屋今日三ツ目とそつけなし
交番で巡査も裸になると知り
銀行の開く間を読んでいる涼しさ

兵庫縣 戸倉普天

十五、六もうひとかどの嘘を言ひ
煙草喫う事も覺へて闇屋に出
おちいさんも一聞程は泳いで見

大阪市 浪玲之介

つけて書く万年筆となりけり
神祕もう破れ一個の避妊薬
葬式の費用ボヤ／＼泣いとれず

抑留

世界地図俵案するだけの地図
二時間は人の人生見た芝居
浮氣でもして來なはれは蔑まれ

鳥取市 大西八歩

寐ころべば机の奥のごみが見え
よく卵産む鶏だつたが締められた

引退は勤め過ぎたる姿なり

滞納け御互ひですと避暑で会ひ
子の寝息うかゞつて読む金瓶梅
借上手まだその上に笑はせて
多産系まだその上に鶏を飼ひ

電話口へ君呼ぶほどに酔うてゐる
八月十三日信州高地へ行く(二句)

梓川水は冷たきものと知り
山の礼儀が乗車順からくづれかけ

大正池

木の精があれば夜毎に出て來そう
下山してもうなつかしい國の空

横濱市 福田山雨楼

二度も血を吐いた若者たじろがす
弁当をフオークでつくく小役人
戦争の傷口だけが癒えたのか
久振り瘦せたと凶星刺されける

秋風は愚に徹せよと薬瓶
インチキな映画をのぞく程に酔ひ
うらむけにたゞんだまの所図繪
プランにはない人だかりのぞいてみ

池田市 戸田古方

涼蔭や院主もライターもつてゐる
頂きは雲のかゝつたまゝでよし

布哇 内藤草一郎

唇を待つ眼可愛や泣きばくろ
寶石で恋の打診をしても見る
紅一点有象無象に取りまかれ
眼をそらしやそらし先に脚線美

ホノルドツクストライク

ドツクストそれ米を買へバタを買へ
ノータイがもう失礼な街のいろ
かすどりの灯はせんざいの奥のおく
夫たり父たりあくびしてゐる畫

尼崎市 水谷鮎美

陳列の観音さまへ掌を合せ

大阪府 西尾葉

ビヤホールいと事務的に運ばれる
差上げて見送る孫は汽車を見る
親子二代のへんくつに母は老ひ
末つ子がビール栓をぬくといふ

へんくつを買へとは抜目ない言葉
夏最中咽喉巻く車掌指輪はめ

初老から鉄砲弾の父となり
褪せても仕官の服で守衛來る
打開策ヒョコを少し飼つてみる
九原則妻のパーマも波が解け

大牟田市 高田抱逸

容捨なく社が潰れゆく入件費
名曲にビールの泡は消えたまゝ
恵まれぬ婚期洋裁へも通ひ
右左我関せずの椅子に着く
前身を隠し掃除婦さんとなり

大阪市 市場没食子

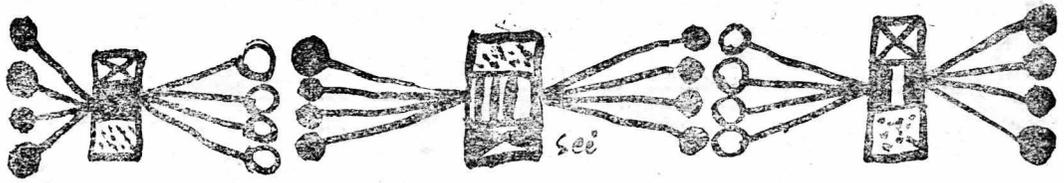
ラムネぬくこんな事にも上手下手
古着屋は笑うばかりで値を言はず
パレーよりやはり床かしき舞扇
街路樹の一と役済んで冬を待ち

名古屋市 吉田水車

二杯目からは落着くビヤホール
ビヤホールすばやくコップ引揚げる
ビヤホール二〇〇〇ほどこぼし
なみ／＼と注いだは見本ビヤホール
ビヤホールアプレゲールの酔ひきれず
おつき合ひ塩豆ばかり喰べて待ち

名古屋市 中西おさむ

乱脈の世に俺もゐるよろよると
乗りおくれさせて駅長手をあげる



待ちぼうけ煙草を遠いところへ捨て

大阪市 正本水 客

洗濯のしずくの下へ難がくる

水族館にて (三句)

大龜の夢水も動こうとはしない

伊勢さびの脚いそがしい忙しい

保護色とはなるほどはぜの眼が動き

雨のバス漁村の匂ひしてとまる

手洗に蟹がいるのも旅のこと

ビードロの青さくらんぼなど盛らんかな

ビードロへ子供の夢を盛りあげる

公休の和服ヒョコの餌にしやがみ

笹舟はさゝ舟だけの波をたて

裏切られつゞけて浮世まだ捨てず

首切りの日も煙突は煙を吐き

親の目に色氣づかない子が淋し

アルバイト位で買えぬ靴のつや

少年の慾野球帽野球靴

奈良縣 尾崎方正

よく眠たとおでこの汗を先づ拭ひ

ふざけなはん女將は煙管持ちかへる

酔うてるです六ヶ敷ことは明日たのむ

姫路市 夷一笑

二三年先のことやと逃げられる

待ちぼうけなさけないほど蚊に喰はれ

秋のさびしさそれを樂しむ

さびしさに妻も酒をすゝめけり

暇なのか仲居電話をかけて来る

不景氣をかこつものども飲み明かし

岡山縣 大森風來子

妻何も賣らぬ構でむき直り

少々赤いと云はれても理論に勝つておど

み離れたトマト地面を横に這ひ

十年前の料理がずらり附録の三

市電スト街は静かに暮れてゐる

生きることにくらくいと末子たのしい

ほんとうはヒューマニズムをおかしがり

青春を煎じつめてる遺書のこる

何かこう矛盾だらけの若さだく

奥の奥しかし一軒借りました

大阪府 橋本美奈子

安い下駄どれをよつてもふしがあり

税金をすぐに納めて馬鹿にされ

呼鈴はこの辺らしいぞ酔うてる

小切手が書ける身分にいつなれる

意地張つて見ても矢張り好きは好き

今日からは他人ですわと荷をまどめ

実直を買われただけの辞令なり

子のいない夫婦へ麻雀招かれる

お隣りは今日も主人がめしを炊き

大阪府 水谷竹莊

久米雄氏岡山駅に築橋

吉備だんご味に自信のあるのれん

行政整理後の國鉄

採算のそれん話に振り向かず

おれ一人涼むに惜しい夏座敷

人と知つてかねずみ嚙るのをやめず

八代市 佐野ト占

腹の立つことばかり殖え石をける

金詰り給料のズレへ妻の顔

云ふ事も云へず会議の隅に坐し

ラブレター一つも書けずそれで好き

理想ばかり事務はちつともはかどらず

兵庫縣 小西無鬼

料飲の客が這入つたジャズとなり

氣の弱い事を家内に指摘され

篠高全國ピンポン大会優勝帰郷

優勝盃狭い故郷に大き過ぎ

古橋全米水泳大会に世界新記録樹立

闘魂へプールの水も温まり

布施市 糸本醉月

男一匹行水へちぢこまり

新憲法佛壇の灯の細く点き

悪戯があるから初発止めなき

小火程の騒ぎインク瓶がこけ

奈良縣 白牛奇朗

夏草のベース附近は避けて咲く

幕おりてまだ目に残る柳河岸

禁制品ですと恩師へはぐからず

弱点を知つてしつこく踊りに來

泣くと云ふ手はもう昔のことになり

危なげに子供等夫婦ごつこする

子が邪魔になりだして三年忌

高知市 月原宵明

秋の冷えもう病人が知つてゐる

高知へ轉勤

轉勤の淋しさ駅のアナウンス

唄だけのはりまや橋にがつかりし

おまはんと云はれて土佐へ來た氣持

家の中みんな見せてる暑さなり

東京縣 山根白星

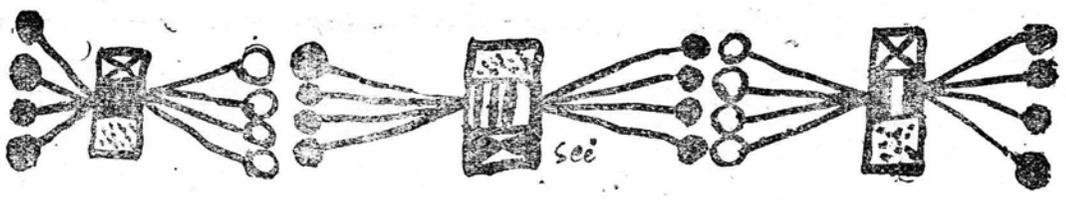
シベリヤ引揚者へ

愛の價值資本論には書いてない

上京は一人息子が赤だとか

靴音は君だと言つてゐたところ

個性なくしごつこの様なネットワークス



大阪市 波 邊 珠 拙
避妊薬もう知つてゐて親なかせ
親方がついて少女にスリをさせ

大阪市 富 岡 淡 舟
落ち目になつて友の來らさず
マスコット大きく揺れる道普請

奈良縣 西 辻 竹 青
遅しく活きて男に縁遠く
冷水摩擦胸の厚みを信じ切り

大阪市 間 島 青 丹 子
待ちわびるホームへすごい革命歌
舞台から奈落へ降りる半ズボン

焼かれても船場は矢張りよいところ
アツプした舞妓にあつた四條の灯

税の話しへ草刈やめた二三人
へい〜〜矢つ張り養子の生れつき

洋服の生地へ女の眼がすわり
バス止めて車掌漢薬買ひに降り

大阪市 上 田 春 柳
炎天にドライクリーニング屋ベタル踏み
陽やけた首に水晶の首飾り

炊煙の見えて嬉しき生家の屋根
布施市 森 下 愛 論

おかしさをこらへ〜て十五六
喰べながら喰べる話がまだ続き

ぶしつけない眼差しをする嫁き遅れ
大阪市 太 田 良 子

言うだけは言うたが後がもの淋し
大きな事言うてもサラリーマンやろが

すねて見たけどほつたらかしにされ
笑はせて患者を手術台にあけ

繻帯を巻けば子供はちんば引き

おとなしい人だと良夫の事を言
間借りでもよいからばち〜捜さうか
晩年の父は不幸が続くなり

尼崎市 靜 岡 忠 八
老いらくの恣にいささか刺戟され
忘れ物あと追いかける箸を置き

晩婚と言へど情婦はあつた箸
自殺自殺自殺に苦痛ないならば

大阪市 松 江 梅 里
袴穿ればおれくばりとひやかされ
扇港や水の都のこの暑さ

人だかり共産党と警察と
貞操と言ふ壁にきて突き当り

岡山縣 直 原 七 面 山
酔つたのか膝から女崩れてき
プラトニックなどと二人の嘯ぶける

愛慾の世界で娘抜手切り
良い人があらうと女絡んでき

慾情の燃ゆる女体の蛇に似て
旋風を起して娘墮落し

澄してるけれど男を知つてをり
逢えば良し逢ねば淋し通勤車

お妾になつてドレスを作らうか
情熱のはのぼると燃ゆ薄化粧

身を任す積りか女やけに飲み
さあお飲み妾も飲むと邪恣の日

ライバルのやせた体へ安心し
戯れの恣打あけて荷が重し

びりて出た男時代の波に乗り
自発的御寄附と言葉美しい

岡山縣 黒 田 笑 泉
照会をされて愛人ドモルなり

横顔を見つめて男はれて居り
神様へおすがり申す程老ける
着飾つて居ても知性の美にまける

吊皮の白い手黒い手皆ゆれる
エロ本を虫も殺さぬ顔で読み

最後まで残つて下駄が見つからず
宇部市 上 林 粗 影

吉田絃二郎著静観記を讀みて
武藏野の道の真白く鼻緒すれ

下痢一日蠅の行方を見守りぬ
審美眼ハラハラさせてスカートの風

秋の夜を一人にされて松むし鈴蟲
船蟲の闇の品とは知らずして

松山市 前 田 伍 健
翡翠の水に矢を射る形に出来
人が人憎く思ふ日小鳥網

小鳥網もし私ならどうしませう
幕あけの秋の舞台えモズしやべり

川千鳥なっていますと寂しい妓
愛媛縣 蛭 子 省 二

OCCUPIED・JAPAN 庵丁鍛冶と成り
大阪市 橋 本 綠 雨

若後家が三人居つて小料理屋
内風呂も書いて料飲寂しすぎ

労組の机風のあるのやう
廻轉椅子後は壁でもものたらず

清水市 富 士 野 鞍 馬
泥棒が同じ列車に乗つてゐた

父の辞職した氣持がわつかてき

可成りやれても兼題になるとさつぱりなのである。練れないのである。磨かれてないためである。こうゆう自覚をもちながらもながら安易な作句態度は仲々あらたまらないものでこまつている。

私の実験はもうこうらで方向轉換を行つてよさそうである。

そこで川柳とゆう詩を創作する時の態度を考えてみたい。それは内容と形式の両面にわけて考えられる。

過日偶然の機会に英詩の權威竹友藻風氏の詩十則なるもの講義をきくことが出来た。それによる。

一、詩を形成する根本としての情緒と表現
二、情緒表現運動の根本としての律

三、律の型
四、情緒を表現する言葉
五、実生活に起源を發する歌謡

六、民族集團の情緒を表現する敘事詩
七、個人の情緒を表現し、詩の中心をなす敘情詩
八、民族の本能とむすびつく劇詩

九、説話体の民謡としてのバラード
十、呼吸とともに亡びざる詩

以上のうち直接密接に関係をもつのは一、二、三、四と十だと考えるので川柳独特の諸性質とこれらとをむすびつけて創作態度の條件を考えてみよう。

内容—素材、情緒と穿ち、こゝに於て歌謡、敘事詩、敘情詩、劇詩、バラード等が如何に取入れられるか調べてみよう。

形式—表現、律、型—省略の問題、ことば—型、音、意味など

このプログラムを展開することによつて創作態度を考えることゆゑ最初の目的を追つてゆきたいと思う。

竹友氏は情緒をもたない人間はないが、全ての人間が詩を作るにゆうわけにはゆかない。それは表現の形式を心得ないからであるといつておられる。

長屋のおかみさん達の語る井戸端会議はそのまゝでは詩とならないし、駅名を羅列した鉄道唱歌はたとえ律とゆう表現形式をそなえていても詩であり得ない。

私はかつて五、七、五にならべさせれば川柳だと思つて作句することによつてずいぶん過失をおかしたものである。駅名の羅列ほどひどくなくともそれに近いことをやつていたことはたしかである。これは詩の素材になるには困難なものである。

これに反して井戸端会議の長屋のおかみさん達は詩人ではないし、詩人としての素養をもつていないから、自ら詩をつくることは出来ないが、詩の素材はその中に含まれている

場合が多い、だから市井詩人である川柳人には井戸端会議の長屋のおかみさん達は見逃す訳にはゆかない。川柳人としての希望はこれらおかみさん達にも、自ら語るもの、なかに詩のあることをさぞらせ詩人にまで高めたと思つているのである。

川柳にはその特殊性として穿ちとゆうものをもつていて穿ちやその他にしばしばつかわれる知性にもとづく矛盾や、諷刺などのおかし味である。矛盾と諷刺は人の弱点を暴くからおかしいのである。喜怒哀樂を感ずるのは人が欲望をもつからであり、川柳はその欲望と眞つ正面にぶつかるのである。そこで「なくなくもよい方をとるかたみわけ」など俗事をよんだ詩が生れるのである。

かゝる詩境は詩に縁遠い人をも詩に近ずける機会をあたえる。だがこのおかし味はある場合軽味となることはいいとして、駄洒落になつてはならぬ。何故なら駄洒落は情緒を忘れた知性だけのおかしみだからである。

川柳は非常に短い詩であるから、歌謡、敘事詩、敘情詩、劇詩、バラードなどそのままの形をもちこむことは不可能である。だが一句の句いを歌謡的とか、敘事詩的とか、劇詩的とかにすることは出来ぬわけではないと思われ

川柳に於ては一句の背後に寸劇、しかも人に美感を感じしめるドラマまで用意されたいど作家として常に念願してゐるところである。

静や靜頼朝の眼と政子の眼 (古方)

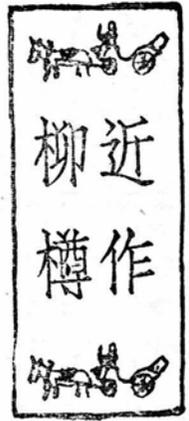
川柳の属性はむしろ俳句より劇や小説に近いともいえる。路郎先生からチエホフの短篇を勉強せよとすゝめられたことがあつた。

だがこれとても意識的にやるとなると余程困難なことであらう。川柳は俳句の如く客観的に終ることなく主観的でなければならぬが、その主観も独自の善的であつてはならず、かつ普偏性、具体性をもつたものでなければならぬ。それに関し素材の取り方について俳句と比較して少々考えてみたいと思ふ。川柳は人生詩であるが、自然を素材にしても勿論差支えない。たゞ自然の純客観だけでは川柳としてはあきたらぬものがあるのではないかと思ふ。やはりそこに多くの人の句いをとり入れなければならぬ。旅行して絶景をみてそれをその場で川柳にすることはむづかしい。作つたものは非常に俳句的になる。川柳らしいものはもつと時間がた

ないと出てこない。だからこ
うゆう場合の即吟の佳句はむ
しる俳句にまかせた方が安全
であらう。自分の主観、他人
の行動の觀察、これらをねり
合せ、燃焼させ、忘れられた
時分に浮んでくる一句、これ
が川柳としては常道である。
さて次は川柳の形式即ち表
現の問題に話をすゝめる。
最初に持ち出されるのは律
即ち日本詩のリズムについて
である。
アクセントの非常に弱い日
本語にあつては頭韻、脚韻の
如きは全然無視出来ないとい

ヤマハ
教育楽器は

日本楽器
南區心齋橋筋二丁目一番
電話 3413



面会が一日延びて借が出来 具塚市千
見舞くれそうなどこだけ報らせませ
お女将さん反共思想ひとくさり
駐在所すだれ下して何か書き
看護婦の寮にダンスの影が揺れ
キャンデーの箸院長の目にこまり
退院の誰か夢なきサンルーム
横流し藝者そしらぬ顔で聞き
仕送りも絶え附添に見放され
もう会へぬように見舞へ涙ぐみ
金かけた香水なれど片想ひ愛媛縣大
すねている頬へタバコをふきつけろ
閉会の辞記者席は誰も居ず
陽の高い宿も予定のプログラム
落ちついた和尚公安委員です
香水のこんなふりよもエチケット
プログラムとりすゝみまして藝妓く
欠勤の出来ぬ会社は金詰り
このつぎは立候補する寄附の顔
老ひしかな妻も老眼鏡が要り 廣島縣芳
悪が利き過ぎ見物に毒づかれ 泉
男 夢女 現に生きたがり
蛙の子相当逃げたつもりなり
それからの女露骨に寄つて来る
あきらめと悔と女にされた後
金のある内に死にたいなど思ひ
成り上りみんな金で済むと決め
夕涼み誰か来たので肌を入れ

腕章の粗末な方が親切に 八代市斗四翁
何が図に当つたものか妻揚子
標札が一枚かゝつた共稼ぎ
火葬場にこれきりの税拂つてる
亂杭歯あれで二号もあるような
妹と言つてしまつて溝が出来
可愛氣があつてペンく惜まるく
ズブ濡れの子が配給の傘を抱き
嘘をつく子に言ひ負けた涙です 小松市茶
子をあやす顔に女は生れつき
お隣りの役得ばかり妻の眼に
日の丸を忘れて赤い父帰る
自轉車の荷附に女いゝ度胸
産物の映画も村へ来る文化
頼母しい若さに押され逆らはす
虫干に出て母のセル欲しがられ 熊本縣一
カストリよ税務署等へ匂ふまじ
廣告欄妾宅向の家があり
当ちがひ養女お嫁に行くと言ふ
鈴虫を沈黙させて来た二人
犯人が拳がらなければ自殺説
金詰りなのに逢う日が近くなり 具塚市庸
彼に似て来たから彼の子と言うの
嘘を言うなとも一人の僕が言う
良く撮れてゐると褒め氣に障り
決議文ちやんと用意がしてあつた
責任のない下ツ端でよく喋り
ユラ／＼金魚は糞をもてあまじ 兵庫縣草
雄雞の恋のさゝやき派手なこと
鼻さきで蛋をとつてる近視眼
尿瓶を看護婦小笠原流に持つて
鉄つかひ医長ゴム長尻からげ
忘れた字母は庖丁でかいてみせ 岡山縣茶
夕涼みくしやみ一つでお開きに

でもそのもつ意味は比較的低い。それは日本語の一語一語が母音をともなつてゐる爲めでもあろうか。日本語詩の律として考えられるのは普通七五調といわれるものである。短歌に於ては五七五七七の三十一語よりなり、川柳並びに俳句に於ては五七五の十七語よりなる。この十七語は同時に七音である。この十七語は母音をもちながら著るしく子音的性質を帯びてゐる。又川柳中には七七の十四語をもつて形成される詩のあることを附言する。

民謡 歌謡の如きものから琵琶歌、長唄、謡曲、浄るりはことごとく七五調を基にしてゐるし、ことに親まれおぼえられてゐる一節はきつちり七五調になつてゐる。これは日本人の呼吸の長さに関係があるのかも知れない。最も素朴な仕事唄々よいとまげ、どつこいさの如きもやはりこの調子をとつてゐる。だから國語学や音声学の事はよくわからぬが七五調で表現されてゐるといつても過言でないであらう。五七五は日本人に調和されたリズムである。だから作句せんとする時、ある一つの情緒に刺戟されて得たテーマを五七五にならべるといふことだけでとにかく詩の形だけはその後の推敲によるのである。

推敲に際して第一に取上げられるのは形の問題である。漢詩にゆう起承轉結は一番短い絶句の中にももりこまれてゐるものであるが、五七五詩にはこれすら取入れることは無理である。むしろ川柳に於ける形は省略の問題につきるといへよう。

省略は同時に強調を意味する。省略によつて強調することは東洋藝術の一つの特性である。最近では西洋に發達した藝術もこの東洋的手法を参考にしてゐる。ことに映画には之が最もたくみに利用されてゐる。ロシヤ映画のプトフキンやエジエンスタインによつてやかましくいわれてゐるモンタージュ(組合せ)理論がこれである。

句の上に表現し得るものはあれもこれもと欲張つてはならぬことを下心としてもつていなければならぬ。一句を通して次へへ舞台をひろげるのは鑑賞する人の隨意であるし、又その様に發展性をもつたものこそ句として上々のものである。だからこつちから駄目を押す必要はないのであつた。駄目を押したり、ならべたりするほど舞台はせばめられる。これが説明と描写のちがいである。

盆だから安心してろよ 鮎の子よ 同
 灰皿を思ひくゝに引よせる 同
 行政整理に会つたその上子が産れ 同
 暑さにもめげずアベツク腕を組み 大牟田風 浪
 御主人が死んでそれからいゝ暮 同
 弱き者汝の口はあなどれず 同
 泳げないらしく深さを先づ尋ね 同
 母性愛こんな嵐に迎へに来 同
 苦勞したお方だすなとついできれ 徳島縣夕 鐘
 朗らかに飲めと云ふたに寝てしま 同
 とことん飲んで蚊の餌となり 同
 送別会昔の舞を所望され 同
 パトロンを袖にする氣の身拵らへ 同
 豊作になる暑さなら愚痴るまい 尼崎市聽 松
 養子迎へて外に出て呑む 同
 孟蘭盆偶感 同
 われも又やがて斯くして祀られん 同
 だと言つて足らざるを知るのみ損 同
 キヤンデーも食はずに妻は戻つて來 同
 ポケットに忘れさられた五十銭 大阪府さ ち
 夕刊の列古橋の新記録 同
 娘十八外國タバコくゆらして 同
 時の人横顔だけをうつさせる 同
 自斂傳に妻ののろげが多すぎる 同
 インテリと云はれ煙草で焼いた指 兵庫縣夏 六
 その日く凡夫凡婦の忙しさ 同
 子の理窟負けないところが俺に似る 同
 草むしり眞実意地になつて來る 同
 誘ひ出しの其の手にのゝ親が居り 岡山縣鉄 字
 偽りの恋とは知らず家を捨て 同
 街路樹に夜明の雨を教へられ 同
 金無いと見たか女は別れる氣 同
 はやつてる如く賣切れなどと書き 滋賀縣美 秋
 裏返し服恋人は見逃がさず 同

女からの電話やつぱり人ちがひ 同
 涙もろい身に相談が多すぎて 同
 ジルバダンス脊中に蚤でも居る様な 大阪市春 雄
 倦怠期食ふものも無い世に贅沢な 同
 ハイキング飲まぬ者から先に立ち 同
 來て見れば左程でもなしむこ養子 同
 肉体をアプレゲールの波にのせ 滋賀縣敬 二
 寝過した朝をお化粧だけはして 同
 恋すれば流れる雲も嬉しくて 同
 盃を見事にほした女事務 愛媛縣巖 同
 ことづかつた様な顔して避妊薬 同
 白米のこぼれた様に白帆見ゆ 同
 空巢かと思へば家宅捜査なり 同
 窓の外ばかり見つめて一人旅 同
 新学期呆けた顔が出揃ふ日 今治市醉 歩
 新録の女フアンと言つたきり 同
 ニュールツクあの娘もやほりつとして 同
 私の郷里四國よ背なの灸 同
 意地張つて見ても矢張り病み上り 大阪市小 柳
 病み疲れ疊で寝たい夢ばかり 同
 故郷は良きもの桑の実が朱い 同
 寄ん越なく先妻の子にすがり 同
 障子など明けりやいくらか氣晴れん 兵庫縣齊 花
 漫才の縹緞に惚れた手をたゞき 同
 涼しさは肩へとまりに來るとんぼ 同
 農夫俄雨にぬれるも甘んじん 愛媛縣旭 童
 あごひげを鉄でつんでつゝがなし 同
 羨しいものに漫画の自由奔放 同
 ビヤホール浴衣掛けでは寄り付く 佐賀縣えい 在
 さく岩機今日の暑さを又唸り 同
 引揚の今日と言ふ日を信じ切り 同
 泰次郎もう読みあいてる旅愁 熊本縣清 秋
 蜜蜂の女尊男卑を見て帰り 同
 花火とは別にスパークする市電 同

省略とははじめからなくも
 がなのものを捨てるのではな
 い。なければならぬ大切な
 ものを折つて、しかも意
 の通じるようにすることであ
 る。川柳ではしばしば涙をふ
 るつてこれをしなければなら
 ない。しかしうまくこれをし
 た時には安心していても相手
 はその省略したものを自分で
 つけ加えてくれるのである。
 その方法には
 (一) 句はす
 (二) 強める
 (三) 積重ねる
 (四) 比較
 (五) 比喩
 等があげられる。具体的な句
 例をあげてみよう。
 風の中馳けて來た子の熱い錢

子をつれた夫婦夫婦へふりか 件内
 えり
 比較も焦点をあきらかにする
 ために役立つ
 洋館へ先祖の棺のおきごころ 豆 秋
 玄関へ位負けせぬように立ち 福 造
 一雫井戸一面にひびくたり 緑 雨
 写生吟は巧みな比喩で生かさ 秋
 れる場合が多い。
 棒ぐいに少くよるけて花なが 秋
 海岸の松は逃げ出す姿なり 折れたかと思へげ起さる後さ
 だが省略にも限度がある。省 古 句
 略しても誰にでもわかるとゆ
 うことである。省略しすぎて
 わからないようになる場合と
 あまり特殊なもので解説を要
 する場合がある。その他文法
 的な一通りの基準もふみはず
 してはならないだろう。
 最後に表現の手段としての
 言葉をしらべてみよう。
 川柳の用語は平言俗語であ
 る。だから用語としての重要
 な要件、型、意味、音の三つ
 のうち型が一番軽く取扱はれ
 る。俳句の好む雅語は型の美
 をもつが川柳にはそれはな
 い、だが人によまれるものと
 して、読みちがいされないだ
 けの注意は必要であろう。平
 易な漢字と仮名との配置塩梅
 も考慮しられなければならない
 まい。川柳に於けるさきの律の

ワンダフルロサンゼルスに、ウッオよ大阪市旅 風
 盆踊り隣の町の輪にはいり 同
 間違つた儘を真似てる盆踊り 同
 インターンの野球詰所から声援し 大阪市恵 風
 一匹の蠅を患者はもてあまし 同
 梅雨空へ新の洋傘借られたり 同
 何んでも名をばあげたい氣だあり 大阪市葉茶子
 海水着あれ買つてよと動かない 同
 露店先淋しくゆれる螢かご 同
 夕立は退社時間をねらつて來 岡山縣満 年
 半ズボンぬらして潮釣り氣負いたち 同
 念入りの化粧裸になつてつけ 同
 見解の相違と話まどまらず 貝塚市周太郎
 夏祭り師匠も一役買はされる 同
 又飲んで帰つた様な登りやう 同
 恋人も同じ輪に居り盆踊り 岡山縣牛 步
 スカートの身の潔白を知つて居る 同
 スタートへ自信があつてあわてない 同
 二十一叩き直して呉れて無し 東京都万 年
 仲裁は見せつけられた事も言ひ 同
 雑談へ外れて一人雨を聴き 同
 嫁が來て急に氣が合ふ老夫婦 岡山縣久米女
 失業をしてゐますの濃化粧 同
 恋人の頃はその親大事がり 同
 子供の絵レールがいつち太う画け 岡山縣富 至
 算盤に合はぬ地主で老ける父 同
 看護婦の乳房見つけた手術台 同
 ステッキを大きく振つた嬉しい日 今治市映 月
 踊り太鼓にあわて出た月 同
 泣き声と桶のこだまがこもる風呂 同
 借りてきた自轉車見えるさ座し 鳥取市日満子
 早朝出勤平社員かと思つてた 同
 子等すでに賣収されて妻の嘘 同
 暑いからどなる音痴へ月靜か 大阪市文 雄

食膳に机つかつて理想なく 同
 いらぬと嘘言ふ妻の弱い顔 同
 密談が灰皿きれいなまゝ終り 三原市正 一
 退屈だから後家さんの噂も出 同
 何処へ行く生命か車窓を蠅が這ひ 同
 嘘と嘘見えすいてゐて面白し 愛媛縣曉 風
 マルクスを信じ故國の土を踏む 同
 言論の自由言いたいだけしやべり 同
 運不運大学までも卒へたのに 愛知縣吐 平
 映画館探した妻が他人めき 同
 シペリヤの心駄々どけ始め 鹿兒島華 水
 引揚の目に誘蛾灯強くしみ 同
 頼まれた葉書はこちもちで書き 大阪市葉 光
 豆秋さんの猫を讀んで 同
 食膳え甘える猫も來て座り 同
 老らくの妻がたすきよエプロンよ 奈良縣宇都羅 羅
 皺の手を握り交して語るなし 同
 今日こそ宵寝しようど夏の朝 大阪府桃 村
 三人の弁当つめる妻があり 同
 ほたるまで二つ並んで光つてる 大阪府和 枝
 されど又たのしからずや一人旅 同
 科学者の縮める世界恐ろしや 兵庫縣無 聖
 フラツパも貰えばやはり女性なり 同
 疲れたる寝姿手足派手にのび 鳥取市秋 男
 金借りる話團扇であしらはれ 同
 筆不精胸に光つたボールペン 滋賀縣忠 一
 肉体美泳げないのを口惜しがり 同
 愛人と間違へられて好きになり 滋賀縣斗 志
 賣れ行きで氣嫌の姿る小商人 同
 洗髪貞女の心くづれそう 愛媛縣孤 峰
 夕立も浴びて潮時雑魚を釣り 同
 豊作のニュースばかりで米三日 兵庫縣尋 四
 男世帯バケツで顔も洗つとき 同
 見舞客便所のたびに追ひ出され 大阪府紋四郎

問題も、この配置の型によつてリズムを感じます場合がある。型の上でリズムがどへのへば発声した時にもリズムが感ぜられるものである。

次が音に関することであるが、俳句が眼でみた美しさを重んずると同じように、互選も清記互選、運座とゆうことをあまりしない川柳に於てはむしろ、耳から入る要素は大い。

それから意味であるが、やはり言葉のもつ意味は文学固有の領域として尊重すべきものであらう。モーパッサンは世に数方語あらうともそこに用いられる言葉は一語しかない、それを発見するのが文学者の責任であり、使命であるとうてうている如く非常に大切なもので薬罐とゆうべきところを鉄瓶にしてはならないし、奥さんとゆうところへお上さんといつてはぶつこはしである。

詩を作るより田をつくれ、人生がもし田だけ作つていてほんとの幸福がくるものなれば詩は無用の長物であらう。しかも川柳は最も民衆に近く接触している詩である。お高くどまつている詩ではないのである。有閑人の有閑事業ではないのである。働きつゝ生

れ出す詩である。呼吸どゝもに亡びざる詩、呼吸どゝもに人生に重要な役割をはたす詩は川柳から生れてくるのではなからうか。

どんなものでも川柳になるかどゆう問題に答えて、結局は腕次第、修業次第とゆうことにはなるが、まず川柳らしいもので練習や必要がある。川柳をはじめて十年、のつとむつかしさがわかりかけて來た。

柳樽をくりかへし読み直そうかども思う。詩の世界には川柳の外に俳句も短歌も詩もつて、それぞれの領域をもつてゐる。それらの表現可能範圍をよく見極めて、無理な表現をしないことが、大事ことだと思ふ。



歌川國貞



と江戸川柳

阿達義雄

歌川國貞のことを、直接詠んだ川柳は数句に過ぎないが、役者の似顔絵が國貞の時代に相当多く詠まれていたのを見ると、國貞が川柳に與えた影響は頗る大きいのではないかと思ふのである。國貞については、藤懸靜也博士の『増浮世絵』の記事が最も要を得ていると思われるので、左に之を引用させていたゞくことにする。

三代豊國 歌川國貞が、師名をついでからの名で、三代に當るのである。角田氏、俗称は庄藏、後に省藏と改む。國貞は初代豊國の門人で、優れた技術をもつた人である。本所五ツ目の渡船場の株をもつてゐたに因んで、五渡亭と号し、又香蝶楼ともいふた。非常に製作力に富んだ人で、美人風俗を始め、種々の題材を扱つたが、特に役者絵の作はおびたゞ

しい種類がある。自ら二代豊國を名乗り、一陽齋と号し、年の字の草体を崩して、玉の形にした中に、名を著した落款を用ひた。この時代の作が今日多数見られることから推しても、製作に精勵したことがわかる。なほ一雉齋富望山人、富眺、月波楼、北梅戸、桃樹園などの号があり、晩年には琴甫舎、喜翁などともいふた。國貞が、豊國の襲名に關して、本郷豊國を惡しざまにいひ、歌川をうたがはしくも名乗り得て、にせの豊國にせの豊國といふ落首もあつたとかで、國貞が自ら二代豊國を稱するけれど、二代豊國の部で述べたやうに、文政十一年の碑に一雉齋豊國と二代を稱するも、のがあれば、國貞が二代といふのは、當を得ない。吾人はこれを三代と呼ぶなければならぬ。一陽齋豊國となつて、役者絵や草雙紙などに盛んに筆を取つた頃には、彫摺の技術の方は益々發達

して、金銀色を用ひ、或は細敏な模様を現はすことも、さまで珍らしくないほどであつたが、絵画としての藝術的價値は、著しく減じて、全体から観て、浮世絵版画の衰頹も、可なり甚しくなつてゐた時代であつた。

國貞時代の作品 國貞の作品は、非常に多いが、五渡亭國貞と名のついた時代のものによい絵が多い、美人絵なども、藝術味の豊かなものには、多く國貞と署してある。國貞は僅かな種類ではあるが、風景画をも作つてゐる。その中で、霧中之山水などは頗る出来のよい作である。薄墨に淡い藍と黛赭が、あしらつてある位で、上品に見えらる。又紅毛畫と標して、風景に人物を配して、西洋画めいた構図のもの若干種を作つてゐる。

三代豊國の役者繪 當時の役者絵は、芝居興行と密接の關係があつて、主なる劇で、上演された狂言中の、主なる人物を絵にしてその開演中に、盛んに賣り出すのであるから、役者似顔錦絵の出版は、なか／＼忙しい仕事であつた。狂言が定ると、在來のものならば、これまでの型によつて下図を作るのであるが、それでも役者の好みで、着衣などに變つた色を用ふる場合などは、舞台の上で実見する必要があるし、新作物となつては、実見の上、着衣は勿論、主要な色までも書き留めて、下図にかゝるのであるから、それを開

演中に、一日も早く賣り出さうとすることゝして、一通りの苦心ではない。三代豊國は多忙中に、それを巧になし遂げてゐたのである。

三代豊國の死 三代豊國は江戸に住んでゐたので、俗に亀戸豊國といふ。製作からの収入も多大であり、元來豪氣な氣象であつたので、其の頃の浮世絵師として、非常に奢侈尊大な暮らし方であつた。

元治元年十二月十五日、享年七十九才で歿した。寺は三田の功運寺で、法号を豊國院員匠畫徳居士といふ。

特に江戸時代の文獻を避け、藤懸博士の御研究を引用したのは、歌川國貞が問題の人物であつたことと、役者絵の川柳を解釈鑑賞する上から非常に簡を得て居て、有益な記事であるからである。

國貞も下女が面には筆を捨て

(一〇一)

右は國貞が有名な似顔書きであつたことに立脚して詠まれたものであり、川柳・狂言では、下女を無教育者、その顔を珍妙なものとして扱ふのが定石である。蓋し、面とは珍妙な顔、膨れた顔、滑稽な顔など並々でない顔のことをいふ場合が多い。尙、國貞を似顔書として詠んだ句には、

天自然羅漢のそばに似顔書き (九四)

似顔書き羅漢の横つちに住み (一〇八)

國貞が本所五ツ目に住んでゐたことは、藤懸博士の文に述べられてゐるが、溪齋英泉の『無名翁隨筆』にも「本所五ツ目後龜井戸に住む」と記してある。本所五ツ目には天恩山羅漢寺があり、此処には、五百羅漢の像が安置され、あらゆる人の似顔が一場に集められて居るから、似顔の練習にもモデルにももつて來いと云ふ処である。尤も國貞は専ら役者の似顔書きだから、劇場内の場席の羅漢台にも引つかけた句であらう。羅漢台と云うのは、舞台向つて左方の役棧敷と臆病口とに挟まれてゐる辺で、此処は一段と高くなつて居る。次に本所五ツ目に羅漢寺があつた關係の句さへも作られてゐる。

五ツ目の土間て羅漢の友をよび (一〇七)

五ツ目をヤット羅漢で横に見る (一一一)

之は、國貞にも浮世絵にも關係はないが、ほんの参考までに附記したのである。

狐仙に優る國貞が書いた猿 (一六三)

森狙仙は江戸時代の画家、西宮の人で、初め画を狩野派に学んでいる。猿を描くに妙を得ており、大阪に住んでいたが文政四年に歿した。『大江戸』の中に関根黙庵氏は次の様に述べている。

「文化五年三月、中村梅玉、浪華より初下りの時、附幕として、『近頃河原達引』を演じ、與二郎を勤めて非常の当りを取りしが、國貞此時、梅玉の猿廻しを描き世評高く、大いに賞讃された。是が似顔絵を描きたる初めである。」

『無名翁隨筆』にも略々似た様な記事があつて、錦絵・團扇絵・草双紙が大いに行われ、をさ／＼師豊國に劣らなかつたと記されており、特に團扇絵については、「歌右衛門猿廻し與次郎ウチハ絵ヲ初テ画シ也」とあつて、更に、「師歿して後、よく自立して、浮世絵、役者似顔画に名高く、数百部の合巻草双紙を出せり。読本は二三部に過ぎず、画手本の類は未出す。(未だ出さずか。)

当世の風俗を寫すに妙ある事、よく豊國の画則を學び得たり、當時の名手と云ふべし。」

とある。次に、國貞を語るに忘れてはならないのは、柳亭種彦の『田舎源氏』の挿絵であつて、『田舎源氏』の賣行きの良かつたのは、その當時に於ては、寧ろ其の挿絵の所

爲とも言われている。主人公光氏公の似顔は、人氣役者として、大江戸の若い女の渴仰の的であつた名女形役者瀬川菊之丞がモデルにされたのであつたから、その人氣の素張らしさは大變であつた。又、はじめ、種彦のつもりでは、光

氏の描は普通の大名畫にする様に言つて遣つたのであつたが、國貞は、それでは余り色氣がないとて、大髻に紫紐を巻いて先を割つた所謂海老茶釜といふ髻に直して、大好評を拍したのである。

畫の蚊に燒筆くべる貞が妻
(一三五)

燒筆は下絵を書くのに用いる筆で、柳などの木の端を燒き焦したものである。拭えば直ぐ消すことが出来たから、鉛筆の無い江戸の頃には之が盛んに用いられた。「貞が妻」は國貞の妻。似顔畫の流行兒たる國貞の家では、使い捨てた燒筆がいくらでもあつたので、妻は之を火にくべて蚊遣とすると云うのであらう。

國貞の名画ひいきの表具物
(一〇二)

瀬川菊之丞か岩井半四郎か、國貞の画いた名画を最眞客が表具にしたことを詠んだ句らしい。原文には、「ひる

きの評具物」とあるが、いゝ加減の当字・誤字は此頃の常故に之を改めて掲げた。三分照君國貞へ式分賄路
(一一八)

照君は、前漢の元帝の宮女、王昭君になぞらえて、三分の畫三を三分照君と爲し、三分の上妓も昔の王昭君などと違つて、名を賣り客を取る爲に、一日の揚代の大部分に當る金を國貞の処へ賄路を贈つて出来るだけ美しく描いて貰つて、宣傳をさ／＼怠りないことを言つたものと思われる。照君とあるが恐らく昭君のつもりであらう。廓でも絵師へ賄路を贈つたらしいことは、

三千の廓でも画師へ袖の下
(一二七)

という句によつても知られる。「三千の廓でも」とは、前漢の三千の佳麗の居る王宮を念頭に置いてのことであり、此処では既に王昭君以外

の女は、絵師毛延壽に対し、袖の下から手を出して絵をかゝせ
(一二二)

式千九百九十九人は絵師承知
(一〇二)



秋の斷片

正本 水客

温泉とところどころ

すつかり陽が落ちて了つた山懐に疲れきつたようにバスが止る。小さな町全体を濼とした湯煙りが立ちこめていた。川べりに下りてみると、石で囲まれた湯元から熱湯がゆたゆた、たぎり出ている。栗をゆでている素朴な女の人、後姿を私はあかず眺めて居た。湯は一日五色に変わると云う。夜は山氣がひし／＼と胸に通つてくる。——紀州、湯の峰温泉——

傳説を聞く湯煙りに眼鏡ふく先ほどこから一寸とだえていた地鳴りが、また頭の上へおゝいかに響き出す。夏の名残を思ふす雲が外輪山の肩に暮れ、ついでに。道路から谷への急な徑を下りきると手のとびく茂みに湯澗がながく落ちていて、谷底いつばい庭に落ちた突当りに、ごうごうと火きな瀧が懸つている。淡い湯煙りをあげている温泉プールを夕闇にすかす見ながら、私は手にした名も知らぬ秋の草花を宿の玄関へそと置いた。——阿蘇山麓戸下温泉——

草千里かげぼうしから暮れ行く
「湯へ行きましようかあ」廊下のわきに伺つてある山椒魚を覗いてみると、宿の女中さんが表から手拭を振つて呼んでいる。溪沿の石ころ道を二丁行くと淡い電燈が一つ点いて、川は湯煙にかすんでいて、傍の岩の上へ浴衣を脱ぎすてると、山の冷気がさつとおそつて来た。大きな岩の根方からフツ／＼と湯が湧いて、じつと身を洗めていくと、辺りは虫の聲に包まれる。文字通り降るような虫の聲である。——美作、湯原温泉——

野天湯は月の光りをあふれさせ
淡いランプの光りがゆれて、遠くの部屋で唄う安曇節が妙に耳について疲れた体が容易に眠れなかつた。白々と夜が明けてみると、黄と白と水色が鮮烈に入り混つた白根山の爆発火口が眼に痛いほど朝の陽に光つていて。温泉の硫黄の匂いが何処までもどこまでも從いてきた。熊笹の露を分けながら、濛濛の秋を私は静かに上つて行つた。——上州、万座温泉——

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北



中年以後の作家に

麻生路郎

中年以後に、何かを學ぼうとしても、遅々として進歩のあとを示さないやうに云はれて居る。果してそうであらうか。川柳もそうであらうかそのことに就て、少しく述べて見たい。ものを學ぶと云ふことは第一は記憶力によらなければならぬが、若いものは概して中年以後の者に比して記憶力が強いやうである。第二は感傷性だが、これも若い者が一般に旺盛だと云へよう。第三は理解力であるが、これは、どちらがどうかとは云へない。第四は経験であるが、これは中年以後の人達の方が豊富だと云つても云ひ過ぎではないから。

ところで若い者は直線的に、その學ばうとするものへ走るが、中年以後の人達は曲線的であつたり、間歇的であつたりするのである。地点へ到達するのにはかなり時間を要するやうである。

若い者はある地点へ到達するまでは早いので、そこから前方へ進むのが困難となると、道ぐさを食むたり、困へる轉換を劃する。中年以後の人達は、はじめから俗事にさえぎられて、足踏みをする事が多いのである。そして若い人の方

を見ると、自分よりも遙に上方に登つてゐるので、羨望したり、落胆したりする。人によつては、あきらめて麓へ下つてしまふ人がある。若い人は自分よりも先に登つた人であるやうな事、しかも自分よりも若いだけにピッチが早いと云ふことを忘れて、只向うの高さだけが眼に映るのである。高く登つてゐるやうに見へても、若い人はいつ足を踏みすべらして、一瞬にして自分たちより後方に落伍するかも知れないのであるが、そこまでは考へない。中年以後の作家は傍目をしないので、自分の力で、自分の持つてゐるいゝんな経験を杖にして、あせらずに、最後の目標に向つて進むことである。そこに道はおのづから折けるものである。

近ごろK氏から貰つた通信は中年以後の作家の悩みを代表してゐるやうに思へるので、その一節を茲に抜き書して見やう。

「拙句に対する御批評御礼を申し上げます。まだ、勉強が足りない感じがますます深くなりました。勉強と申しまして古句をよむと、川柳をすみからすみまで見る位のもので誠に心許ないやり方です。ですから先生からの添削批評は非常に力になるのです。繰返へ

振返ると白馬岳の頂上が一万余の朝の陽をあびて桃色に光つてゐる。左のザラ道の眞下は日本最高の地にある白馬温泉。私は右側の谷へ鎌ヶ岳の尾根を一氣に下つて行つた白樺の急斜面を、無理失理に開いた徑を、文字通り木の根岩角にぶら下りながら下ること半日、遙か下の方にゴーと云う溪の流れが響いてくる。夕方近くやつと川ぶちに降りついて、大きなコップに手の切れそうな谷の流れを掬つては掬つては呑んだ。三杯目ぐらになつて、やつとブーンと硫黄の香を感じて温泉も近いなと思ふ。紅葉ははじめて岳樺の色が眼にしみる。——北アルプス山麓、祖母谷温泉——

河原の湯月たかく高くと
かくり

旧街道へ道をとつて、神崎の東下りで名高い甘酒茶屋へ寄つてから、こゝは大湧谷と芦の湖の中間にある姥子の湯、むかし金時が産湯をつかつたといふのでその名がある。自然石でたゞんだ湯槽も嬉しく、なかは眞青に透き通つた明ばん泉。手も足も肩も人の世のものとも思ふぬ大理石のように、白く青く美しい、不思議な湯だ。早稲田を出たと云う宿の若主人と湯の中で、いつまでも話してあつて居た。こゝはまだ電燈が話してゐない、夜は女中さんが萩のしめりに袖をぬらしながらランプをはこんでくる。——箱根姥子温泉——

芦の湖の風へ湯の香がおり

秋の陽に汗ばんだ体を大きな岩と岩のあいだへザアツと沈めた。湯は少し上手に大きく口を開いた。洞窟のなかから、こん／＼と湧き出ている。河心の方へ体をいざらせると川水と湯が入り混つてひやりと冷たい。ピンと足の先へ岩魚が當つていた。雪溪を溶かして流れ下る小黒部川の上へ、ハラ／＼ハラ／＼と木の葉が惜し氣もなく散りつづけた。

越中、鐘釣温泉——
トロッコの見下す下もまた紅葉

雨の音で眼がさめる。湯槽の窓から雨を見ていると、山氣のなかへ暖い湯の香があふれてゆく。妙高山麓の牧場へ抜けるプランを中止して、山越に引返す腹を決めると、午には中土の宿へ出られる心算でかるく朝食をとつて出掛けた。水の取入れ口についで、小徑がついてゐるのを辿りながら左へ山を巻いて行つた。足の下は何寸にも散り敷いた紅葉の葉だ。前も左も右も後も眼のさめるような紅葉の色だ。シト／＼シト／＼と降りつづく雨に辺りはコソソとの音もしない。サツと時風が吹いてくる。と眼も眩むばかりの黄と赤の幔幕に包まれて了つた。晝はもうとつと過ぎてしまつて夕方に近い。まるで紅葉の色につかれた夢のような徑が、もう何時間も続いている。おかしいとは思ひながら、さうにも徑を変えざる氣にならず、たゞ歩き続けた。

雨に染つた赤ひと色のなかに、私はたしかに紅葉の精を見たやうな氣がした。

信州、小谷温泉——
ほだ火うつくし山の神祕に口を開す
「隨筆」
第二宗教
具探市
千原庸司

私は長い闘病生活に於て肉体的にも、精神的にも大変苦しみ続けられて来たが、川柳に精進する様になつてからはその苦しみからも随分救はれる様になり、川柳を初めた事に大変感謝してゐる。

且つて大喧嘩で窒息せうとしたその直後の氣も顛倒してゐた折にさへ、豆秋氏の
びよい／＼とうなぎを火中小にわけ

と言ふ句を何の関聯もなしに思ひ出し、その整妙な面白さに心うばわれて、暗血後に必ず襲げられるの耐え得られない様な心の不安から救はれてゐた事なごもあつた。又高熱の続く病床に在つても幾多先輩の名句を味ふことにより、又自分で作句することにより、病苦を忘れ、苦悶から脱れ得て来たものであるが、宗教本來の目的が救ひにあるとすれば、私にとつて川柳は私の宗教であつたと云へると思ふ。

私はこれを第二宗教と呼んでゐる。闘病はまだ続くと思ふが、今後は川柳に精進することにより、如何なる病狀の悪化にも平氣で耐えて行けるやうに思つてゐる。

し、短い御批評は短いなりに、くわしい御批評はくわしいなりに、何度ではありませぬ、何十度拜見するかわかりませぬ。とにかく頂いた当座数日と云ふものは日通の運動にもホケットから離れませぬ。しかし正直の処ますくむづかしくなります。ますく作りなく、なりました。なせもつとく若い時から始めなかつたらうかと今更ながら悔まれてなりません。梨里さん、まだ勿論お若い方ですが、あの立派な句を拜見しますと唯々羨ましくなりませぬ。落胆さへします。敬服してゐます。その代り拙句の中で一つでもおほめに近い事でも何ふとうれしくてたまりませぬ。人に見せたり、友人に書いてやつたりします。五十七才の童心を御笑ひ下さい。中学時代から和歌もかじりました。俳句もかじりましたが、今から十六、七年前、因は俳句も何となく余りに主観に囚はれすぎてゐるやうな、共感性が乏しいやうな氣がし出しまして、それから川柳に興味をもち始めたのです。四十才位の時でせう。日暮れて途遠しとやら、然しがつかりせずには精進しませう。外の仕事はへこたれても川柳だけは前途有望のつもりで青年の氣で精進しませう。(以下略)

そこには作家のいろんな経験を生かす余地が多分に存在するからである。しかし努力以外には上達の方法はないと云ふことを知っていたのだ。

川上嘉市氏(日本楽器製造株式会社社長)の歌集「行路」の後記に次のやうなことが書かれてある。

「私の作歌経歴は丁度十五年になる。即ち私が歌を作り出した抑々の起りは、四十八歳の時であつた。大抵の歌人なら最早六家になり澄してゐる頃に、尋常一年生からぼつ／＼出立したのであるから、随分氣がよい。(中略)大抵の人は「もうこの年になつては」と投げ出してしまふ。だがそれでは、若い頃始めなかつた藝事や趣味等に対しては、遂に終身習ふ機会を失つてしまふ。それは人生にとつて本當に淋しいことである。

実は、私が絵を習ひ始めたのも、四十二歳の時だつた。(以下略)

以上の川上氏の文章を読まれたなら、中年後の作家の多くの悩みは消し飛んでしまふに違ひない。事業に、政治に多忙な川上氏にして、歌集「行路」を刊行し、その装幀まで自分でされてゐるのである。四十をすぎやうが、五十をすぎやうが、思ひたつたらいつからでも始めたい。

勉強は一生すべきものである。

川柳普及の実際

丸山弓削平

私が川難岡山支部創立句会に義弟小橋隆如を介して投句したので昭和二十二年一月、その後友人七面山、笑泉兩君を斯の道に誘拔して相共に精進すること一年半、今年一月、初めて日本一川柳町樹立の穴目標を立て、結社し、会員獲得に狂奔すること八ヶ月、今会員六十名を擁して、当初の計画を著々実現しつつある。

さて川柳を發展、繁榮せしめる爲に二つの道がある。

その一は、川柳そのものを良くする事、即ち川柳の内容的時代的前進であり、その二は、川柳の普及である。

前者は川柳論によつて鞭達されるものであり、川柳初歩の私か今語らんとする處ではない。

憶ふに、川柳が大家の詩として親愛されるにもかゝらず、詩歌、俳句に比して普及繁榮しないのは何故か、そこには大きな原因が存在することが必定であると見なければならぬ。

川柳普及の方法に二つある。

その一は、内向的で、結社、句会、柳誌句集の發行であり、その二は、外向的で、対社会的宣傳、即ち川柳祭、放送、新聞利用等である。こうした方法手段は相當に行はれ乍ら、尙且つ其の效果の測足でない理由は何か、それは、総てこうした運動がいつに大指導者

によつてのみ行はれ、細胞群の地方、地区の指導者は、それに馳せ参する一員に過ぎず、自から如上の方法を探つて地方地区に川柳普及の實を図る熱意と方途を持たないからである。

柳人を分類すれば只作句を己れ一人愉しむ人、自分の周囲に人を集めて川柳と、その合会を愉しむ人、川柳を普及繁榮せしめ熱意に燃えて実行する文化運動者の三つである。

地方、地区の中小指導者は、その第二と第三であり、そして遺憾乍ら第二が絶対多数である。

川柳普及の實際の第一の力点はこれら地方指導者が第三の人とならなければならぬ。

國家社會の變遷發達の歴史の基礎をなすものは經濟に有るとマルクスが喝破するまでは総て英雄の歴史であつた。

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウツチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳としてゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二一二頁 定價 一〇〇円 送料 金四二円

取次御注文は 大阪市住吉區萬代四丁目二番五番地 川柳雜誌社 編輯口原大塚七五〇五〇

麻生路郎著 水武書房版

川柳發展の根底も決して華々しい川柳非詩論や新人輩出論ではない。誰でもが興味をもつて迎える所謂大問題ではななくて、實は地味な、何でもなさそうな、斯うした処に根本的な大要因が埋伏してゐるのだと私は見る。

然り弓削川柳社が第一期計画に会員五十名、第二期計画に百名の目標を樹て、既に僅く八ヶ月にして会員六十名を越してゐる事實を以つて、その眞実であることが説明される。

全國の地方指導者が、若しこれにならわんか、川柳黄金時代は、こゝ数年にして實現することが出来るかと断言し得る。

★弓削川柳社が十月九日、川難美作支部として發足、その創立句会に出席のため路郎主幹が西下されることとなつた。――社の黒板――

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

麻生路郎著 水武書房版

小さいけぞ象の鼻には変りなし 黙
 本当の象かと子供念を押し 天
 長い鼻ふりく象の拾い喰い 淡
 象の不満地面へちかふきつる 舟
 思出は象の背中のつたこと 古
 象列車親のやりくり考へず 恒
 また象を見られる國の子に還り 旅
 象の鼻まず日本のごみを吸い 紫
 象一匹日本中の心湧く 十空子

川柳雑誌 ウイロー社句會 (ハワイ)

七月 古川慶花麗報

食

世は忙しカロリで生命量れる 野
 労資共口先だけで食へません 煙
 口たけば食指動いた振りもせず 亭
 食ふまゝに食はせたまのい、度胸 磯
 恋もなく三度きつちり腹がへり 草
 食はず来て客は済んぢ嘘を言ひ 河
 食は倒れ着倒れそれは過去のこと 舟
 食はれば食へばは氣になる親であり 泉
 矢印のネオンが目立つ軒食堂 一
 恋はなし先づ食ふだけが世なり 我
 食卓へ日本鯛疲れよう 曉
 今更に食へるたのしき考へる 魔
 あしたも食ふ悩みに誠をたかめる 笑
 感激に満ちて食卓灯がともり 夢
 食ふと云ふことに良心捨て、書き 流
 流水

雑川 大牟田支部句會 (牟田)

八月廿日 富田一葉報
 盆休み・押賣り・釣銭・嵐・世間の裏

釣竿を母が叱つた盆休み 水
 引揚者ですと押賣り立去らず 波
 押賣りばせぬ氣露天の汗を拭き 修
 釣銭はチップの様な定價表 枯
 釣銭を小さな見栄が置いて出る 扇
 釣銭の始末チユーインガムこなり 柳
 一銭の釣で税金逃れる氣 抱
 逸

雑川 篠山支部句會 (兵庫縣)

八月 小西無鬼報

涙・蝸・初恋・姉・町・坂
 叱らずに訓す涙が身にしみる 無
 言ひわけは涙きつちり拭いてから 齋
 これしきへ直ぐ涙ぐむ母だつた 無
 塩でもむ妻の勇氣に蝸は萎え 句
 蝸だけが喰えぬ入歯を寂しがり 凡
 絞首刑の様に手釣の蝸は垂れ 無
 祖母の初恋聞いて笑つてつがな 一
 姉さんの忠告今頃身にしみて 一
 来客へ姉は上手にお茶を入れ 指
 法学士婚期を捨てた姉があり 花
 人柄は好かれて姉の弱いたち 一
 妹に姉の内氣がもごかしく 花
 町の人野菜に水もかけて賣り 一
 お祭の町へ臨時の列車出る 凡
 新興の町に昔のボンブ小屋 齊
 町の人といわれなすびをもちて 一
 この坂を越せば直ぐだ元氣 指
 坂を吹く風が他郷の第一歩 齊
 合唱が静かになつて坂を往く 凡
 凡志

雑川 竹原支部句會 (廣島)

七月十六日 於愛鳩居
 弘津柳慶報

首切・未亡人
 首切を控え新調見合せ 愛
 首切の嵐をよそに四疊半 同
 未亡人の内職派手な事になり 同
 親切を振つて未亡人のさみし 同
 未亡人隣近所の意地もあり 同
 苦虫の掃宅に女房さとりなり 同
 首切へ女房案外強いなり 同
 再縁へ子供がなくて氣が動き 同
 首切と決れば妻が働く氣 芳
 芳泉

雑川 姫路支部川柳忌句會 (兵庫縣)

於燕子居・夷一笑報

過去・髪・乗りかへ・仲よし・日のべ
 過去帳をくつて祖先の功を知り 燕
 過去を皆話して帰る相談所 揚
 お互にふれたくはない過去を持ち 樹
 過ぎ去つた事と水にも流されず 和
 生活の苦を物語る母の髪 凡
 パーマネットもう年頃になりまた 燕
 髪をつや世帯やつれと云ふけれ 一
 先づ髪をほめて物賣りぬけれな 笑
 髪結ふて来ても張合ひのない夫 樹
 髪を結ふことにも母親もめて 揚
 乗りかへへ度白靴氣にかゝり 同
 のりかへへ背負ひ袋をすてられ 孤
 乗りかへへそれから先を立ちつく 一
 乗りかへの服でなげまの被に出合 燕
 仲よしはごちからからともなく誘 笑
 仲よこを卒業してもと誓つたが 燕
 子供連れ昔忘れすたすれて来 凡
 仲よしの肩を持ち合ふ兒のけんか 二
 仲よしに靴下の穴おしえられ 揚
 日のべした日に又雨が降り雨 同
 草薺馬日のべにすれば晴れて来 一
 日のべも茶葉子がふにうつら思 同
 三度目の日のべむりやり行行 樹
 雨よふれ日のべうれしい旅の宿 孤
 日のべしてよかつた今日の秋日 笑
 笑鬼

雑川 女性川柳會

七月

にぎりすし・ハンカチ・露
 上品なにぎり若さへもの足らず 若
 にぎりすしを夜更けを酔うてる 葉
 にぎりすし小雨になつて家でた 美
 ゴシツプににぎり好き書いてあり 奈
 應接へ別に運んだにぎりすし 梨
 お手製で大小あるにぎりすし 定
 にぎりすしヒョイヒョイと折つめ 美
 梯子酒妻へはにぎり通しとき 梨
 ハンカチで包んで呉れた薬瓶 花
 ハンカチの中で螢が光るなり 代
 車窓から振れは淋しいハンカチ 江
 人生へ露の例えを今日ぞ知る 松
 袖口が露にぬれてる花鏡み 昌
 花の露少女は感傷的になり 子
 露の道二人は歩き続けたたり 梨
 白鷺川柳會七夕句會 (姫路)

八月七日 於笑鬼居

風鈴 夷一笑報
 むこうでも涼んでるの煙草の火 笑
 六階まで上り風鈴一つ買ひ 一
 虫の音と風鈴庭にとけこんで 和
 旅に來て思はぬ花火見てあたり 一
 一笑

阪田膽寫版

大阪府北区芝田町二五

株式會社 阪田商會

電話 福島一六三九番



編輯室にて

▼秋の夜の編輯室は静だ。ときり
に虫が鳴く。「虫なげばなくで原
稿料になり」と云う刀三の句が又
しても思い出される。▼前号も好
評だった。嘘にもさう云つてた
だけば張合いがある。もう十一時
を過ぎてゐる。私たちの仕事は勞
基法とは別の存在である。▼本号
の表紙は柴谷幸二郎画伯を煩はし
た。▼亞鈍君と霞乃と顔を合した
座談会を久しぶりにやつた。豆
秋、没食子、古方の諸君も参加し
た。▼古方君は更に、「さんなも
のでも川柳になるか」を執筆して
勉強ぶりを示してくれた。▼阿達
義雄氏は「歌川國貞と江戸川柳」
を寄せられ、柳人の知性に訴えられ
た。▼その他にも各方面から原稿
を寄せられたが誌面がないので割
愛した。諺とされた。▼前々号
で紹介した小猫はラッキーと呼ば
れて隣近所の人たちまで愛され
ていたが、何者にかがかわされ
たのか、姿を消してしまつた。私
の眼にまだにのこつてゐるのは
虫を捕えて來ての残虐ぶりであ
つたが、一疋の風も捕えはしなかつ
た。襖を掻きむしつたこと、毎夜
のやうに夜あそびをしたことであ
つた。それでもいなくなると一寸
淋しい。▼十一月の大阪市の文化
祭に川柳が取り上げられてゐるが
この稿を書いている時にはまだ各
柳社の委員によるプロが決定せぬ
ので遺憾ながら内容の發表が出来
ない。(路)

動靜

▼本社川柳忌は
九月三日午後六
時から大宝文化
会館三階に於開
催した。▼大阪
通信病院川柳會
は九月十日午後
二時開催。▼
南区醫師會文
化部川柳會は
九月廿日午後
七時大宝文化
會館で開催。▼
南海鉄道川柳
會は九月廿一日
午後五時卅分から四階會議室で
開催、以上何れも路郎主幹出席。
▼川雜ハワイ支部は八月例会を
廿一日にカワイロア海岸の某氏
の別荘で開催、來月からは又會
議所樓上で開くとのこと。▼川雜
篠山支部(兵庫縣)は八月二十日
に例会を開催。▼宇部・下関合同
追善川柳會が九月四日長門一ノ
宮福王禪寺で修せられた。▼川柳雜
誌社姫路支部創立會が麻生路郎
先生を迎えて十月十一日夕五時か
ら姫路市西町の坪八七夷一笑居で
開催される。▼第一回全日本觀光
川柳大會が栃木縣觀光協會後援で
十月廿二日に鬼怒川館で開催され
る。兼題「觀」○丸瀧「光」三太郎
選「祭」雀郎選各三句吐、切十月
十八日、投句は三〇四、會費八〇〇
円、詳細は栃木縣廳内同協會宛。
▼四國四縣川柳對抗放送はサンマ
ータイムの關係で下の様に變更さ
れた。十月四日、午後七時半より
徳島、高知、十一月一日、午後
七時半より、愛媛、高知、十二月
六日、午後七時半より、香川、徳
島、なほ九月一日の取組の愛媛
(橋本迷峰氏)香川(岩谷春郎氏)
は三對二で愛媛の勝となり、飛入
角力も五組あり、出題も懸賞で盛
況だった。▼街頭川柳會が六
文銭川柳社の主催で九月十五日に
上田市海野町公會堂廣場で開催さ
れた。▼まつき會(滋賀縣)は九

最短時間で結ぶ
大阪！名古屋
時間25分
3特急
毎日3往復
座席指定制一
特急料金 ¥50
上本町線
7.40 12.40 16.40
名古屋線
8.05 13.05 17.05
近畿日本鉄道

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
● 雜道 (小原流・宋生流)
● 茶道 (表千家流・宗徳)
● 洋裁・書道・日本畫
● 學曲・聲樂
● 手藝・古典・新舞踊
● 長唄・小唄・謡曲
● 服飾デザイン
詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ
大阪日本橋
電番二二七番

シマズに ヨクキク
大學目藥
結膜炎
トラホーム
つかれ目
15cc 正價 ¥30
至天堂製藥

淡路町二ノ一三、東洋館から刊行された。

Made in occupied Japan
川柳雜誌 第四卷
B列5号 毎月一回一日發行
一册 (金三〇円) (送料三円)
牛ヶ年概算 金一九八円
一ヶ年概算 金三九六円
昭和廿四年九月廿五日印刷
昭和廿四年十月一日發行
大阪市住吉區分府西五丁目二五番地
行印部 麻生 幸二郎
發行所 **川柳雜誌社**
電話口庄大阪七五〇

募 集
課題吟募集 (十一月五日締切)
代理 (十句) 大鶴喜由選
夜汽車 (十句) 北川 春巢 (十二月五日締切)
每号募集
近作柳樽雜詠廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)
投稿規定
▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雜吟を募る。
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。